

〔論 文〕

# ソシュール学説の一つの有効性についての考察 — 「記号の恣意性」について—

松中 完二\*<sup>1</sup>

An Analysis of the Valid Thought in Saussure's Linguistics  
— On “*l'arbitraire du signe*” —

Kanji MATSUNAKA\*<sup>1</sup>

## Abstract

Ferdinand de Saussure was a Swiss linguist, considered by many to be the founding father of modern linguistics. His theories have been widely accepted in the field of linguistics and in other fields as well. His most lasting contribution to linguistics is his *Cours de linguistique générale* (*Course of General Linguistics*). Referred to as the Bible of linguistics, it has had a lasting impact on the research of the 20th century and remains a tremendously valuable spur to linguistic research today.

Saussure's concept of *l'arbitraire du signe* (the arbitrariness of the sign) was developed in *Cours de linguistique générale*, which discusses the arbitrary relation between sounds and meanings. In this study, I draw examples from Saussure's rough drafts, found in 1996, and argue for a new interpretation of Saussure's *l'arbitraire du signe*.

**Keywords** : Saussure, Cours de linguistique générale(CLG), *l'arbitraire du signe*, Saussure's rough drafts

## 0. はじめに

松中 (2016)<sup>(1)</sup>において、CLGとSaussureの自筆草稿との記述の違いを洗い出し、Saussure学説における言語記号の差異という矛盾について、その問題の根本的原因を究明した。今回はSaussureの没後3年目の1916年に教え子の手によって編纂され出版されたCours de linguistique générale (CLG)と1996年に発見されたSaussure自身の自筆草稿を基に、Saussure学説を支える主軸である「記号の恣意性」の問題について考察し、その主張がいかにして言語を科学として扱う際の礎となったかについて論考する。

## 1. 言語記号の恣意性

Saussureの記号理論における最も重要な主張は、「記号の恣意性 (*l'arbitraire du signe*)」という考えである。これはSaussure学説の全般に関わる問題であると同時に、記号の対立や意味の問題に直結する性質を持つきわめて重要な問題である。Saussureは言語記号の恣意性を言語学の一般原理における「第一原理」として位置付け、言語を科学として扱う己の学説の理論的な礎であると考えた。「記号の恣意性」についてCLGでは次のように記述されている。

“Le lien unissant le signifiant au signifié est arbitraire, ou encore, puisque nous entendons par signe le total résultant de l'association d'un signifiant à un signifié, nous pouvons dire plus simplement : *le signe linguistique est arbitraire*.” [斜体部原文ママ] (1916 : 100)<sup>(2)</sup>

能記と所記とを結ぶ連絡は、任意的 *arbitraire* である。別の言葉で言えば、記号とは能記が所記と連合して出来た全一<sup>トータル</sup>体を意味する以上、更に簡単に、「言語記号は任意的である」と言えよう。” [ルビ原文ママ]

(小林英夫訳, 1928 : 98)<sup>(3)</sup>

\*<sup>1</sup> 共通教育科  
平成28年10月25日受理

“能記を所記に結びつける紐帯は、恣意的なものである。言いなおせば、記号とは、能記と所記との連合から生じた全体を意味する以上、我々は一層簡単に言うことができる：言語記号は恣意的なものである。” [下線部原文ママ] (小林英夫訳, 1940 : 92)<sup>(4)</sup>

言語を科学として扱う際に、記号の恣意性をその「第一原理」とすることは Constintin のノートでも同様で、以下のように述べられている。

“Le lien qui relie une image acoustique donnée avec un concept determine et qui lui confère sa valeur de signe est un lien radicalement arbitraire. Tout le monde [est] d'accord.

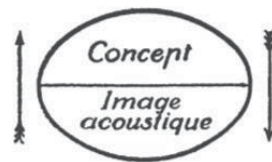
La place hiérarchique de cette verité-là est tout au sommet.” (Eisuke, Komatsu. 1997 : 287)<sup>(5)</sup>

“一定の概念コンセプトと与えられた聴覚イメージシーニュを結び付けるもの、そしてそれに記号の価値ヴァリューを授与するものは、根本的に恣意的な関係です。誰もがそう思っています。

この本質は、まさしく最上級のものです。” (相原奈津江・秋津 伶訳, 2006 : 168)<sup>(6)</sup>

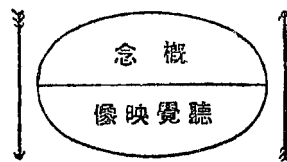
そして CLG では以下のような図を用いて、記号と音の結び付きについて説明している。

“Le signe linguistique est donc une entitépsychique à deux faces, (中略)



Ces deux éléments sont intimement unis et s'appellent l'un l'autre.” (1916 : 99)<sup>(7)</sup>

“されば言語記号は二面を有する精神的実体である。(中略)



此の二つの要素は密接に結合し、互に喚起し合う。” (小林英夫訳, 1928 : 135)<sup>(8)</sup>

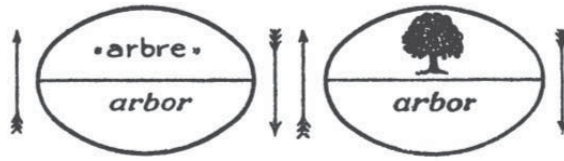
“それゆえ言語記号は二面を有する心的実在体である；(中略)



この二つの要素はかたく相連結し、相呼応する。” (小林英夫訳, 1940 : 90-91)<sup>(9)</sup>

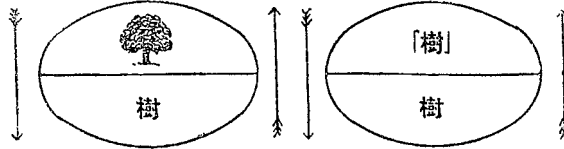
この図は音と意味の不可分離性と相互喚起性を示したものである。しかし原文では、「この二つの要素はかたく相連結し、相呼応する」の部分に対応する言葉はなく、この一文さえもまた Bally と Sechehaye による創作であることが今や明らかである。そして CLG では、ラテン語の arbre (樹) という語を上げて、その音と概念の結び付きを表したその後に続く以下の二つの図が有名である。

“Que nous cherchions le sens du mot latin *arbor* ou le mot par lequel le latin désigne le concept 《arbre》, il est clair que seuls les rapprochements consacrés par la langue nous apparaissent conformes à la réalité, et nous écartons n'importe quell autre qu'on pourrait imaginer.” [斜体部原文ママ]



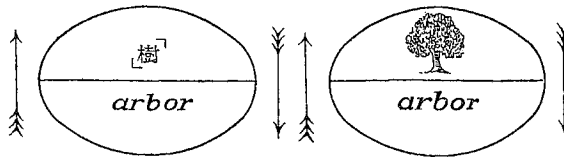
(1916 : 99)<sup>(10)</sup>

“漢語の樹<sup>ジュ</sup>の意味〔下図右、語は下半面、意味とは概念で上半面〕或は漢語が「樹」なる概念を指すに用ひる語を求めるならば〔下図左〕、言語が取持つ近寄せのみが真相に適つて居る様に見え、我々は想像し得る他の何物をも斥けるものなる事が明かになる。”〔ルビ原文ママ〕



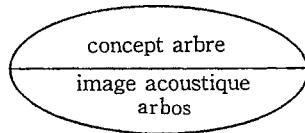
(小林英夫訳, 1928 : 135-136)<sup>(11)</sup>

“ラテン語の *arbor* の意味を求めるにせよ、或はラテン語が「樹」なる概念を指すに用いる語を求めるにせよ、言語が認めた照合のみが真相に適うものとして、我々に現れることは明瞭であって、人は他に随意的照合を想像しえようが、我々はそれらをすべて斥けるのである。”



(小林英夫訳, 1940 : 91)<sup>(12)</sup>

しかしすでに丸山 (1981 : 71)<sup>(13)</sup>や末永 (2011 : 83-84)<sup>(14)</sup>でも指摘されているように、これらの二つの図も同様に、Constatin<sup>(15)</sup>のノートには出てこない。Constatin のノートにあるのは、以下の図だけである。



(Eiuke, Komatsu. 1993b : 286)

そして Engler 版 (1968 : 150)<sup>(16)</sup>における Dégallier の断章番号1109にあるのは、

“Tout rapprochement de terme <s> qui ne serait pas celui-là, nous le répudions comme fausse piste, dans cette recherché des deux termes que comprend un signe.”

“我々は、聴覚映像と概念の結び付きに見られるものとは異なるようなあらゆる結び付きは、記号が含む音と意味の二つの項に関する研究においては間違つた方法としてこれを捨て去るのである。” (筆者訳)

という記述である。

更に末永朱胤 (2011 : 85-86)<sup>(17)</sup>が指摘するように、Saussure 自身の説ではこうした記号と概念の結び付きを説明する図における上下二本の矢印が存在しないこと、一本の矢印がある図は七個あるが、そこでの矢印は常に下から上、すなわち signifiant から signifié に向かうものの一方向のみのものが四個、あとの三個は両端に矢じりの付された一本の縦の矢印が楕円の真ん中に存在するものとなっている。このことは音から意味、すなわち記号表現から記号内容を想起することはあっても記号内容から記号表現を想起しないということになる。

Saussure は言語を記号として捉え、記号には音形と内容が結び付くが、これらを結び付ける原理として絶対的な対応性は存在せず、それは恣意的なものにすぎないと見る。そして signifiant と signifié の間の結び付きは恣意的なもの

であるとする。Saussure は、“arbitraire (恣意性)” という用語に格段の注意を払っていたようである。というのも、それまでの社会学や哲学では、“arbitraire (恣意性)” という言葉を「自由選択」という意味合いで用いていたからである。自然言語の場合、先述したように記号の音形と観念を人間の意志で自由に選択したり取り替えたりすることは不可能である。こうした用語に対する懸念は Saussure の、

“Une partie seulement des signes dans toute langue seront radicalement arbitrariness. Chez d’autres (signes) intervient un phénomène au nom duquel on peut distinguer un degré. Au lieu d’*arbitraire* nous pouvons dire *immotivé*.” [斜体部原文ママ] (Eisuke, Komatsu. 1993b : 297)<sup>(18)</sup>

“言語全体の中で、記号の<sup>シニフ</sup>ある部分だけは、絶対的に恣意的でしょう。他の〈記号〉では、程度を識別できるような現象が起こります。恣意的<sup>アルビトレール</sup>の代わりに無根拠 *immotivé* と言うことも出来ます。” [太字部とルビ、原文ママ] (相原奈津江・秋津 伶訳, 2003 : 173)<sup>(19)</sup>

という言葉における “*immotivé* (無根拠)” という言葉にも見て取れる。これにより、聴覚イメージと概念の関係はなんらかの恣意性によって決定されるのではなく、偶然的要因によって偶発的に決まり得ることを意味する。

単語がある言語の中で意味を有するのは、その言語を母国語とする話者の間で暗黙のうちにそれが了承されているからにすぎないのであり、この了承は契約のような取り決めによるものではないと Saussure は考える。恣意性はあくまでも単語の意味と音形の結び付きが変化することを説明付ける原理としてのみ有効に働くのである。そしてこの恣意性の不即不離の性質ゆえに、異なる言語間の単語に絶対的な対応性が存在しないという説明付けが可能となる。単語の意味と音形の結び付きに恣意性がなければ、ある一つの言語で同じ意味に対応する音素列はただ一つでなければならず、そこには一つの物に対して一つの語 (名称) という確固たる結び付きで変異を認めないことにより、同音異義の類は生れないことになる。しかし実際には身の回りには同音異義が溢れている。Saussure の学説で恣意性による単語の変異をどう説明付けるかは、記号の対立と意味との問題と同じく、言語学が解決すべき問題である。同音異義や多義の現象がこれまでの Saussure の学説や CLG の説明では解決しないことは松中 (2016)<sup>(20)</sup>で見たとおりである。そのような Saussure の学説にあって、同音異義や多義の現象を説明する唯一の手がかりがこの恣意性という考えである。

## 2. 恣意性の必然性

そもそも Saussure はなぜ、言語記号の恣意性をことさら強調したのであろうか。その理由は、聖書や Aristoteles に代表される古代ギリシャの言語名称目録観とも言うべき言語の捉え方に終止符を打つためであったと考えられる。Saussure は語における観念と聴覚イメージの間の関係を、それまでの言語哲学における「形」と「意味」とは異なるものとして捉えており、こうした考え方と決別するために「言語記号の恣意性」を声高に主張したと思われる。古代ギリシャでは、Platon の対話篇である *Kratulos* (クラテュロス—名前の正しさについて—)<sup>(21)</sup>において、名称とそれが指示する事物との関係が自然な成り立ちにより形成されるという考えと、名称とそれが支持する事物との関係が契約的な成り立ちにより形成されるという、すでに言語についての二つの考え方があったことが記されている。前者を“*phusei* (自然)”, 後者を“*thesei* (契約)”と呼んで区別するが、前者には *Kratulos* を筆頭にした *Herakleitos* の流れを汲む学派が存在し、後者には *Helmogenes* を筆頭にした *Demokritos* の流れを汲む学派が存在し、これら二つの学派により言語についての考え方をめぐる議論が展開されていた。しかしこの議論は有効な解決を見ないまま今日まで続くものであり、またその性質から言葉と物との関係に終始し、いずれにしても言葉は“物の名前”か“既成の意味や概念を指す記号”でしかなく、どちらに転んでも言語が事物に名づけをするという性質からは逃れられない。Saussure は聖書や Platon 以来の言語名称目録観というべき言語記号が事物と名称とを結び付けるものであるとする言語に対する古典的思考方を否定し、Humboldt 的な「言語の本質は、世界を思考の鋳型に流し込むことであり、これが言語の作業である」(1836)<sup>(22)</sup>という考え方も否定する。その方法として、記号が「概念」と「聴覚映像」によって結ばれるということにより二つの心的事象の間の関係が物質的なものではなく抽象的なものであることを強調し、その結果、言語記号の恣意性という原理を説いたのである。そして音と意味の問題についてギリシャ哲学以来の古典的方向性から外れ、そこに恣意性という付かず離れずの自由な関係を認めることで、単語の変化と変異の説明付けを可能にしたのである。また同時に記号の恣意性という考え方は言語を記号として捉えることから必然的に導かれる現象であり、言語を科学として扱うのにもこの考えは有効に働くのである。それまでの言語名称目録観を否定するところから始まり、言語の創造性の原理とそれを解明しようとする科学的基盤に、Cassirer (1944 : 133)<sup>(23)</sup>をして Saussure を「十七世紀において物理的世界について



のわれわれの観念全体を変えたガリレオに比する」と言わしめる理由がここにある。

Merleau-Ponty (1945 : 207)<sup>(24)</sup>は“事物は命名の認識の後からもたらされるのではなく、それは認識そのものである”と述べているが、こうした言葉と物の関係が固定的ではなく自由選択の性質を持つものであることを、科学として証明しようとしたのである。よって、丸山 (1981 : 153)<sup>(25)</sup>が指摘するように、Saussureにおける「恣意性」のアンチテーゼは「必然性」ではなく、「自然性」ということになるのである。

また国広 (2006) の、

“言語記号の成立をソシールのように記号の対立から始まるとするとあらゆる難問に遭遇するが、ソシールが最初に批判の対象にした一般の考え方である認知内容から出発することにすれば、いろいろな言語現象もよく理解でき (例えば新語の発生)、直感的にもよく理解できる。” (国広哲弥, 2006 : 21)<sup>(26)</sup>

という指摘も、この恣意性と社会性という部分である程度説明付けられる。

Bouissac (2010 : 169)<sup>(27)</sup>は *signifié* と *signifiant* は人々が育つ過程で習得してきた言語システムによって強制的に与えられるものであり、これらの恣意的関係を意図的に設定できる独立的媒体は存在しない、と言う。だからこそ Saussure は、*signifié* と *signifiant* の結び付きが個人の自由選択によるものではなく偶然的要因によって決定されえることを恣意性という枠組みで説明付けようとするのである。そしてこうした決定に責任を負う特定の媒体はこの世に存在せず、こうした関係を生み出す究極の源は社会的集団であると繰り返し述べるのである。またある言語における新語の産出も、こうした社会的集団におけるコンセンサスによるものであり、その出発点が観念的なものであれ、こうした現象を説明付けるのに恣意性の考えは有効に機能するのである。そうすれば、

“最後に残る問題は、対立記号説で説明不可能であった、なぜある特定の言語記号が特定の音声と意味を結び付けているのかということである。”

という国広 (2006 : 21-22)<sup>(28)</sup>の疑問にも、松澤 (2004 : 51)<sup>(29)</sup>の慣習的な反復という解答以外に、言語記号の恣意性と社会的集団という面からも、更に理解を促進できると思われる。*signifié* と *signifiant* の結び付きが恣意的であればこそ、同じ *signifié* に対して様々な言語で様々な *signifiant* による多様な命名の仕方が可能になるのであり、それは同一言語内においても然りである。このことは以下の Banveniste と Saussure の言葉にも見ることができる。

“Mais le signe, élément primordial du système linguistique, enferme un signifiant et un signifié don't la liaison doit être reconnue comme *nécessaire*, ces deux composantes étant consubstantielles l'une à l'autre.”  
[斜体部原文ママ] (Banveniste, 1966 : 55)<sup>(30)</sup>

“しかし、言語体系の根源的要素である記号は、能記と所記を含んでいて、この二つの成分は互いに共実質的であるから、両者の結びつきは必然的と認められなければならない。” [下線部原文ママ]  
(岸本通夫監訳, 1983 : 61)<sup>(31)</sup>

“Si par rapport à l'idée qu'il représente, le signifiant apparaît comme librement choisi, en revanche, par rapport à la communauté linguistique qui l'emploie, il n'est pas libre, il est imposé.” (1916 : 104)<sup>(32)</sup>

“記号表現は、その表わす思想との関係では自由に選ばれたものとして思われるが、逆にこれを用いる言語共同体との関係では、自由ではなく、強制されたものである。” (小林英夫訳, 1940 : 104)<sup>(33)</sup>

加賀野井 (2004 : 108)<sup>(34)</sup>はこうした恣意性を語と単語の関係だけでなく、音と概念との結びつきも恣意的であるという恣意性の二重性を説きながら、

“何よりもまず、(1)シーニュはラングの体系によって恣意的に決定される。(2)それゆえ、そのシーニュのシニフィアンとシニフィエとの絆も恣意的である。(3)当然ながら、このシニフィアンとシニフィエとによって切り取られる音声の実質や概念の実質も、恣意的なものとなる。(4)とどのつまり、「ことば」とそれが指す「もの」との関係も恣意的になるのである。”

と締めくくる。こうした言語記号の恣意性とそれを決定付ける社会的集団という点に関する Saussure の言葉は、

以下に見るようになお一層明晰である。

“Quand un système de signes deviant le bien d’une collectivité, cela qu’il soit d’ailleurs en soi, ou qu’il soit par sa provenance, il arrive de ce fait deux choses :

1. Il est vain de vouloir l’apprécier hors de ce qui résulte pour lui de son caractère collectif.

2. Il est suffisant, et même nécessaire, de ne prendre que ce produit social, en [ ]

(中略) parce qu’en effet rien ne garantit plus depuis le moment où le système de signes appartient à la collectivité que ce soit une raison intérieure, une raison faite à l’image de notre raison individuelle, qui va continuer à gouverner le rapport du signe et de l’idée.

(中略) La langue, ou le système sémiologique qu’il soit, n’est pas le vaisseau qui se trouve au chantier, mais le vaisseau qui est livré à la mer. Depuis l’instant où il a touché la mer, c’est vainement qu’on penserait pouvoir dire sa course sous prétexte qu’on saurait exactement les charpentes dont il se compose, sa construction intérieure selon un plan.

(中略) Lequel est le vrai du vaisseau sous un toit dans la main des architectes, ou du vaisseau sur mer? Assurément il n’y a que le vaisseau sur mer qui soit instructif pour ce qu’est un vaisseau, et ajoutons-le, qui soit même un vaisseau, un objet proprement offert à l’étude comme vaisseau.” [空欄原文ママ]

(Bouquet & Engler, 2002 : 288-289)<sup>(35)</sup>

“記号体系が集団の財になる時、それ自体がどのようなものであれ、あるいはどこからきたものであれ、この事実から二つのことが生じる。

〈1 この記号体系を、その集団的性格から生じる結果の外で評価しようとしても、実りのないことである。

2 [ ] を除外することによって、この社会的産物のみを取り上げることで十分であり、かつそうすることが必要でさえある。(中略) なぜなら実際に、〈記号体系が集団に属する時から、〉内面的理性であれ、個人的理性に似せて作られた理性であれ、記号と観念との関係を支配し続けることを保証するものなどもはやなにもないのである。(中略) 言語、あるいはどのようなものにせよ、記号体系は造船所にある船ではなく海上に出た船である。それが航海に出た瞬間から、その船の骨組みや内部構造を設計にしたがって知ることができるから〈という理由で、〉その航路を言い当てることなど考えることは無駄なことである。

(中略) 屋根の下で技師の手のなかにある船か、それとも海上の船か、どちらが本当の船であろうか。勿論、船がどういうものか教えてくれるのは、海上の船しかない。そして言い添えておくと、それこそまさに船、船として固有の研究対象として与えられたものなのである。” [空欄, ルビ原文ママ]

(松澤和宏訳, 2013 : 470-471)<sup>(36)</sup>

“C’est seulement le système de signes devenu chose de la collectivité qui mérite le nom de, qui est un système de signes : parce que l’ensemble de ses conditions de vie est tellement distinct depuis ce moment de tout ce qu’il peut constituer hors de cela que le reste apparaît comme inimportant. Et on peut immédiatement ajouter : qui si ce milieu de la collectivité change toute chose pour le système de signes, ce milieu est aussi dès l’origine le véritable endroit de développement où tend dès sa naissance un système de signes : un système de signes proprement fait que pour la collectivité comme le vaisseau pour la mer. Il n’est fait que pour s’entendre entre plusieurs ou beaucoup et non pour s’entendre à soi seul. C’est pourquoi à aucun moment, contrairement à l’apparence, le phénomène sémiologique qu’il soit ne laisse hors de lui-même l’élément de la collectivité sociale : la collectivité sociale et ses lois est un de ses éléments *internes* et non *externes*, tel est notre point de vue.” [斜体部原文ママ]

(Bouquet & Engler, 2002 : 289-290)<sup>(37)</sup>

“集団の事柄となった記号体系だけが [記号体系] の名称に値するのであり、それが記号体系なのである。なぜなら生の諸条件の総体は、集団の事柄となった時から集団以外のところでありうるものとは大変異なったものとなるので、残りのことはすべて重要ではなくなってしまうのである。更にただちに次のことを付け加えることができる。記号体系にとってこの集団という環境は、すべてを変えてしまうのである。この環境は、記号体系が誕生するやいなや発展を遂げていく真の場所でもある。記号体系が集団に対してのみできて

いるのは、船が海に対して作られているのと同じである。記号体系は数人あるいは多くの人の間で理解し合うために作られているのであって、一人だけの自己理解のために作られているのではない。そのために、外見とは反対に、記号現象が、どのようなものであれ、社会的集団の要素を自分自身の外部に残しておくことはどのような時でもないのである。社会的集団とその諸法則は記号現象の内在的諸要素の一つであって、外在的なものではない。以上がわれわれの観点である。”〔傍点部原文ママ〕 (松澤和宏訳, 2013 : 472)<sup>(38)</sup>

Saussure は言語を言語外の事物の一つ一つと対応させるそれまでのギリシャ哲学における言語の捉え方である言語名称目録観を全面的に否定するために言語を記号として捉え、そこでの音と観念の対応関係に恣意性という視点を持ち込んだことはこれまで見てきたとおりである。そして恣意性の問題は Saussure の言う、

“La langue est encore comparable à une feuille de papier : la pensée est le recto et le son le verso ; on ne peut découper le recto sans découper en même temps le verso ; de même dans la langue, on ne saurait isoler ni le son de la pensée, ni la pensée du son; (後略)” (1916 : 157)<sup>(39)</sup>

“言語はまた、一葉の紙片に比べることができる：思想は表、音は裏である；裏を同時に細分せずに表を細分することはできない。同じく言語においても、音を思想から引離すことも、思想を音から引離すことも、できないであろう。” (小林英夫訳, 1940 : 149)<sup>(40)</sup>

という有名な一文に代表されるように、signifié と signifiant の結び付きが表裏一体のものであることの説明に行き着く。しかしこの箇所も丸山 (1983 : 49)<sup>(41)</sup>の指摘によって明らかなように、原資料で一枚の紙の表裏にたとえられたものは言語ではなく記号なのである。上に見るように CLG ではここが“langue (言語)”となっていたために、時枝がそれを誤った原文のまま字義通りに解釈し、それ故に起こる不整合で不当に Saussure 学説を批判したことになる。そして記号内の signifié と signifiant の関係は、動機付けを欠いているが故に恣意的であり、同時に両者が不可分で一体であるとする。しかし松澤 (2013 : 570)<sup>(42)</sup>の解説にも見られるように、signifié と signifiant の関係には必然性は存在せず、記号の二つの側面との関係は、話す主体の意識にとっては常に社会から暗黙裡に課せられた必然的なものとして、継承されるべきものとして現れ、恣意性とそこでの根源的の二重性は、伝承と時間という目に見えない形と効果によってしか最終的な判断は下され得ない。ただ、ここで注意しなければならないのは、恣意性の二つの構造である。一つには物とそれを現わす記号との関係のつながりが恣意的であるが、同時にそれは音と観念のつながりが恣意的でもあることを意味する。ある signe における signifié と signifiant の関係が恣意的であるのは、他の signe との関係がそもそも恣意的であるからであり、このことについて Saussure は Constantin のノート<sup>(43)</sup>における断章番号3350で、「恣意的な関係を考える場合には、注意深く峻別すべき二つの関係が登場するのであって、一つはすでに問題にした↑で表される縦の関係、もう一つは←→で表される辞項間の横の関係である」(筆者訳)と説明している。

### 3. Saussure の自筆草稿における恣意性

結局 Saussure が「言語記号の恣意性」によって表現したかったのは、この恣意性の由来する二重のメカニズムと、langue という体系そのものの無動機性である、という加賀井(2004 : 107)<sup>(44)</sup>の指摘は正しい。そしてこの恣意性と langue という体系そのものの無動機性こそが、signifié と signifiant を自由に組み換えることで成立する同音異義や類義語の発生と解釈という現象を生む一つの要因であると考えられるのである。

しかしながら、同音異義や類義語の発生理由については最後まで邪魔をするのは記号の差異という主張である。これに対して、

“1) le caractère arbitraire du signe <(il n'y a pas de rapport entre le signe et la chose à designer);>.”

(Eisuke, Komatsu. 1997 : 7)<sup>(45)</sup>

“1) 記号の恣意的な特徴。〈(記号と示されるものとの間には関連がありません)〉”〔ルビ原文ママ〕

(相原奈津江・秋津 伶訳, 2006 : 24)<sup>(46)</sup>

“Dans l'association du signe à l'idée il n'y a rien qui lie en soi ce signe à cette idée. C'est une des raisons qui font qu'on doit éviter le terme de symbole, qui en soi est justement le contraire (後略).”

(Eisuke, Komatsu. 1997 : 8) <sup>(47)</sup>

“観念と記号の結合の中で、その記号をその観念に結び付けるものが、それ自体には何もありません。象徴という用語 *terme* を避けねばならない理由の一つであって、まさに正反対のものなのです。” [ルビ原文ママ] (相原奈津江・秋津 伶訳, 2006 : 25) <sup>(48)</sup>

という説明や、

“Nous n'établissons aucune difference sérieuse entre les termes *valeur, sens, signification, fonction* ou *emploi* d'une forme, ni même avec *l'idée* comme *contenu* d'une forme ; ces termes sont synonymes.” [斜体部原文ママ] (Bouquet & Engler, 2002 : 28) <sup>(49)</sup>

“われわれは、ある形式の価値、意味 [サンス], 意義 [シニフィカシオン], 機能ないしは用法の間に、いかなる〈重要な〉差異も設けず、またある形式の内容〈として〉の観念との間にさえも差異を設けることはしない。これらの用語は類義語である。” [傍点部とルビ, 原文ママ] (松澤和宏訳, 2013 : 26) <sup>(50)</sup>

という Saussure 自身の言葉は、これまでの CLG における主張とは正反対であり、また CLG から生まれる矛盾や問題点に対してきわめて大きな解答を与えてくれるのである。Saussure のこの言葉は国広 (1985 : 22) <sup>(51)</sup> の、

“このことは、繰り返しになるが、記号表現と記号内容が決して紙の表裏のように不可分に結び付いているのではないことを示していると言えよう。記号表現と記号内容は、心的な連合関係にあるというのが、その本質的な姿であろう。連合関係は必ずしも緊密なものではなく、どちらか一方が認知されるだけに終るといような不完全な事態が生じることも十分にあり得ることである。”

という指摘を支えるものであり、国広の意味現象に対する考え方が正しいことを証明するものに他ならない。また、

“Ainsi il n'y a jamais rien *dans ce mot* que ce qui n'était pas d'avance *hors de lui* ; et ce mot peut contenir et enferme en germe, tout ce qui n'est pas hors de lui.” [斜体部原文ママ] (Bouquet & Engler, 2002 : 74-75) <sup>(52)</sup>

“かくしてある一つの語の裡には、その語の外に〈あらかじめ存在していなかった〉ものしかけて存在しないのである。そしてこの語は、その語の外には存在していないすべてのものを含み、かつ萌芽的に秘匿しているのである。” [傍点部原文ママ] (松澤和宏訳, 2013 : 120) <sup>(53)</sup>

“(前略) à son tour ce sens général n'est pas autre chose que la delimitation quelconque qui résulte de la presence d'autres termes au meme moment.” (Bouquet & Engler, 2002 : 76) <sup>(54)</sup>

“(前略)「本来の」意味は一般的な意味の多様な現れの一つでしかないのである。この一般的な意味は、〈同じ時点に〉他の辞項が現前することから生じる〈なんらかの〉境界画定以外のものではない。”

(松澤和宏訳, 2013 : 122) <sup>(55)</sup>

という言葉は、類義語と同音異義の発生のメカニズムに対して極めて示唆的である。また類義語が発生する原理もこれと同様に、何かしらわれわれの認知構造と関連する部分があるのではないだろうか。国広 (2010 : 4) <sup>(56)</sup> は「風景」と「景色」の類義語をあげるが、類似の概念を表すのに異なる記号を用いる類義語の場合も、その記号としての文字と意味が闇雲に結び付くのではなく、何かしらの有契性や関連性があるのではないだろうか。「風景」と「景色」はどちらも「景」という目に映る空間的情景と、そこに主体の五感で感じる主観的情緒を含ませるような「風」や「色」などという記号と結び付いている事実がそれを物語ってはいまいか。このことの例として、丸山 (1981 : 304) <sup>(57)</sup> は *i* は音的に軽快さを表し、*d* や *t* は停止を表し、こうした音と感覚のつながりが契約的なものとして擬声語、擬態語の発生原理に自然的な要素の介入を徹底して否定する。一方加賀野井 (2004 : 100-101) <sup>(58)</sup> も *i* は軽快さを表し、*d* や *t* は停止を表すという丸山の例をそのまま自著で繰り返しながらも、それに対する賛否の姿勢は明言していない。加えて日本語の「でこぼこ」という音にはどことなく凹凸感が感じられ、漢字にもそれがそのまま反映されているような感があることを取り上げる。他にも「憂鬱」や「亡霊」の例をあげ、その漢字にも響きにもおどろおどろしさが滲み出ていることと、擬声語、擬態語の多い日本語でこの傾向が一層助長されていく現実を指摘する。また丸山 (1981 : 304-307) <sup>(59)</sup> は、



特に日本語に多い擬声語、擬態語の発生原理を“thesei (契約)”的なものであるとして“phusei (自然)”論を否定することに腐心するが、いずれにしてもこれは Saussure が全面的に否定しようとした言葉と物の対応関係のみに終始する言語名称目録観としての言葉と物の関係の議論に終始してしまう。丸山はこうした言語現象が社会的契約によるものであると言うが、果たしてそうであろうか。国広 (2006: 21)<sup>(60)</sup>は、

“言語学者の多くは音韻の体系性を見て、言語は構造をなしていると認めたのではなかろうか。しかし、すでに述べてきたように、言語は必ずしも本質的な属性として構造的な属性を持っているわけではないことが分かります。音韻の体系も別の要因によるのではないかと疑いたくなってくる。”

とあらゆる構造に対して懐疑的な態度を取るが、同様のことは同音異義や類義語の発生原理にも言えるのではないか。同じく国広 (2006: 21)<sup>(61)</sup>のその後続く以下の文は、表面上に現れる体系性がわれわれの認知世界や生理的機構と何かしらの関係性を有している可能性を示している。

“音韻が体系性を示しているのは、人間の音声識別能力の範囲内で音声を識別してきたためではないか。音声同士が近すぎると識別が難しいし、離しすぎると音韻の数が足りなくなるそこで両者をあわせ考えて今見るような音韻体系に落ち着いているのだと考えることも出来よう。それと同時に、人間の調音器官の構造と働き方も調音に制約を加えていて、子音は大抵唇音、舌音、奥下音に限られているようになっているとも言える。(中略)このような事情が見かけ上の体系性に繋がることになる。このように音韻の体系性は人間の生理的構造的性の反映とも見ることが出来るのである。”

では、同音異義の発生についてその現象を生む原理は、われわれの認知構造からどう説明づけられるのであろうか。その解答は J.Gilliéron (1854-1926)<sup>(62)</sup>の「同音衝突の原理 (rencontre homonymique, homonymic clash)」と鈴木孝夫 (1975, 1990)<sup>(63)</sup>の「テレビ型言語」という視点が一つの解答になると個人的には考えているが、これらの考え方も最終的には連辞の粹を出ない部分があり、その実証は今後の研究の進展を待たねばなるまい。

また Saussure の次の言葉は、記号の音と観念のつながりについて「心的な連合関係にある」とする国広の先の言葉と一致していると見ることが出来る。

“Il arrive que le lien entre le signe et la sonorité est relativement motivé.” (Eisuke, Komatsu. 1993: 298)<sup>(64)</sup>  
 “ある記号と音の響き (との関係) は、相対的に根拠があるという結論になります。” [ルビ原文ママ]  
 (相原奈津江・秋津 伶訳, 2003: 173)<sup>(65)</sup>

“Mais le signifiant et le signifié contractent un lien en vertu des valeurs déterminées qui sont nées de la combinaison de tant et tant de signes acoustiques avec tant et tant de <coupures> qu'on peut faire dans la masse. Que faudrait-il pour <que> ce rapport <entre> le signifiant et le signifié fût donné en soi? Il faudrait avant tout que l'idée soit déterminée<par avance>et elle ne l'est pas. <Il faudrait avant tout que le signifié fût par avance une chose determine et elle ne l'est pas.>” (Eisuke, Komatsu. 1993: 364)<sup>(66)</sup>

“しかし、シニフィアン (と) シニフィエが関係を結ぶのは、無数の聴覚記号が、集塊の中で作られた多数の (裂け目) と結合して生まれる、一定の価値に従ってなのです。このシニフィアンとシニフィエの (間) の関係が、それ自体で与えられる (ためには)、何が必要なのでしょう [か]。何よりもまず観念が、(予め) 確定されていなければなりません、観念とはそういうものではありません。 (何よりもまず、シニフィエが予め確定されたものである必要がありますが、シニフィエもまた確定されたものではありません)。” [ルビ原文ママ]  
 (相原奈津江・秋津 伶訳, 2003: 275-276)<sup>(67)</sup>

#### 4. 結

ここまで見てきた Saussure の言葉は、Bally と Sechehaye による CLG の主張とは多くの点で正反対であるという驚愕の事実が明らかとなった。こうした CLG の主張と Saussure の言葉の問題箇所は、相原奈津江・秋津 伶訳 (2003: 301-302)<sup>(68)</sup>の訳者あとがきにおいて次のようにまとめられている。

“語の意味が使用を決定しているのではなく、使用が語の意味を決定している、というパラドックス。文法が意味を生み出しているのではなく、意味が生じているが故に文法の成立がある程度可能である、というパラドックス。では、何が語の使用を決定しているのだろうか。語を取り巻くものによってである。純粹にラングに関して言えば、語ではなく、語の価値であり、差異である。「言語の中には、ポジティブな語彙はなく、差異しかないのだ、と、そこには、パロキシカルな真実があります」。「差異がお互いを条件付けることによって、私たちは、記号の差異と觀念の差異とを比較対照させ、ポジティブな語彙に似た何かを持つのです。〈その時〉、語彙の対立について語る事が出来、それ故に、〈この結合のポジティブな要素から〉、差異しかないのだと言い張ら〈なく〉ても済むでしょう」。「記号に機能や価値を与えられるのは、記号の差異でしかないのです。」

語はそれとしては存在しない。しかし語に似た何かはあり、それを取り巻いている社会と大衆がある。純粹にラング以外で、何が使用を決定しているのだろうか。なぜ語は変化するのだろうか。[ルビ原文ママ]

CLGにおける Saussure の言葉として、「言語記号の対立によって概念の対立が見られ、記号には差異しかない」(1916: 166)<sup>(69)</sup>という主張と、同音異義や多義に関して「この種の同一性は主観的な定義不能の要素」(1968: 243)<sup>(70)</sup>といった自己矛盾も、先にあげた Bouquet & Engler (2002: 28)<sup>(71)</sup>での言葉で自然に結ばれ、その記述や研究姿勢に矛盾がないことが明らかとなる。結局、国広の疑問は Bally と Sechehaye による CLG での主張とその後の Engler 版を基にした丸山の主張に対して向けられていたものであり、Saussure の自筆草稿における Saussure 自らの主張ではないことが明らかとなった。しかしこのことは、これまでの国広の指摘が無意味であったことを意味しない。結果として国広の指摘は、部分的に Saussure の主張と重なることが多く、このことは言語研究における国広の視点の正しさと、ここでの意味の問題に対する解答の正当性を裏付けるものに他ならない。

記号内の “signifiant” と “signifié” の二つの関係性が、同じ体系内の記号間相互の差異的關係の二次的結果に過ぎないというのが、丸山 (1981)<sup>(72)</sup>を貫く核心である。しかし松澤 (2016)<sup>(73)</sup>によれば、「記号の恣意性」の「記号」とは「聴覚影像」の意味で用いられているという。したがって記号の恣意性とは、「聴覚影像の(概念に対する)恣意性」という意味になる。しかし CLG の編著者は、Saussure が後に提案した新たな “signe”, “signifié”, “signifiant” という術語の意味における「記号」と解し、「記号の恣意性」という表現をそのまま放置する結果となった。その結果、概念 (signifié) と聴覚影像 (signifiant) の不均衡、前者の後者に対する優位を掩蔽することとなり、signifié と signifiant が一対一的に対応するパラレリズムを体系に導入したことが明らかにされている。CLG では、音と思想の間で生じる言語単位の画定を示す点線が言語外の音と思想の領域にまで延長されており、言語の分節がそのまま無定形な言語外的世界を分節すると考える言語決定論を誘発してきた。これにより、松中 (2016: 60-61)<sup>(74)</sup>でも指摘した、丸山圭三郎 (1983: 211)<sup>(75)</sup>によって紹介された signifié と signifiant の対応図が全くもって意味を成さなかった理由が明らかとなる。そして、こうした恣意性の問題は意味論の観点からだけでなく、Saussure 文献学の観点からも批判的再考が迫られる。

しかるにその一方で、言語記号を “signe”, “signifiant” と “signifié” として捉え、それを支える “arbitraire (恣意性)” という原理は、Saussure 学説のみならず言語を科学として扱う際に今日でも有効な考え方である。それを証明するかのようになり、Saussure 学説に反意を示す者であっても、それ以上に有効な枠組みを示し得た者はいまだかつて一人も存在しないのである<sup>(76)</sup>。

## 文 献

- (1) 松中完二, “ソシユール学説の一つの矛盾についての考察—言語記号の差異について—” 久留米工業大学編『2015 久留米工業大学研究報告』第38号 (2016), pp. 54-66, 久留米工業大学.
- (2) Saussure, F. de., “Cours de Linguistique Générale” (1916), Paris: Payot.
- (3) 小林英夫訳, “言語学原論” (1928), 岡書院.
- (4) 小林英夫訳, “改訳新版 言語学原論” (1940), 岩波書店.
- (5) Eisuke Komatsu, “F. de Saussure Deuxieme Cours de Linguistique Générale.(1908-1909) d’après les cahiers d’Albert Riedlinger et Charles Patois”(1997), (Pergamon Press).
- (6) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第二回講義 (1908-1909)” (2006) エディット・パルク.)

- (7) Saussure, F. de., “*Cours de Linguistique Générale*.”(1916), Paris: Payot.
- (8) 小林英夫訳, “言語学原論” (1928), 岡書院.
- (9) 小林英夫訳, “改訳新版 言語学原論” (1940), 岩波書店.
- (10) Saussure, F. de., “*Cours de Linguistique Générale*”(1916), Paris: Payot.
- (11) 小林英夫訳, “言語学原論” (1928), 岡書院.
- (12) 小林英夫訳, “言語学原論” (1928), 岡書院.
- (13) 丸山圭三郎, “ソシユールの思想” (1981), 岩波書店.
- (14) 末永朱胤, “ソシユールの記号概念と聞き手の立場—記号の図の矢印について—” 『ヨーロッパ文化研究』第30号(2011), pp. 79-97. 成城大学大学院文学研究科.
- (15) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Cours de Linguistique Generale. Premier et troisième cours d’après les notes de Riedlinger et Constantin*”(1993 a), Collection Recherches Université Gakushuin n° 24. Tokyo: Gakushuin University.(相原奈津江・秋津 伶訳 “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第三回講義<増補改訂版>” (2009), エディット・パルク.)  
\_\_\_\_\_, “*F. de Saussure Troisième cours de Linguistique General(1910-1911) d’après les cahiers d’Emile Constantin*”(1993 b), Paris:Pergamon Press. 及び小松英輔, “ソシユール自筆原稿の研究” (1994), (平成6年~平成8年度 科学研究費補助金基盤研究B(2) 研究成果報告書 課題番号06451091) (相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.)
- (16) Engler, R., “*Cours de Linguistique Générale, Edition Critique*”(1968), Wiesbaden:Harrassowitz.
- (17) 末永朱胤, “ソシユールの記号概念と聞き手の立場—記号の図の矢印について—” 『ヨーロッパ文化研究』第30号 (2011), pp. 79-97, 成城大学大学院文学研究科.
- (18) Eisuke, Komatsu, “*F. de Saussure Cours de Linguistique Générale. Premier et troisième cours d’après les notes de Riedlinger et Constantin*”(1993), (Collection Recherches Université Gakushuin n° 24).
- (19) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.)
- (20) 松中完二, “ソシユール学説の一つの矛盾についての考察—言語記号の差異について—” 久留米工業大学編『2015 久留米工業大学研究報告』第38号 (2016), pp. 54-66, 久留米工業大学.
- (21) 松本亦太郎, 木村鷹太郎訳, “プラトーン全集” (1903-1911), 富山房.
- (22) Humboldt, W., “*ÜBER DIE VERSCHIEDENHEIT DES MENSCHLICHEN SPRACHBAUES UND IHREN EINFLUSS AUF DIE GEISTIGE ENTWICKELUNG DESMENSCHEN-GESCHLECHTS*”(1836), Berlin.(岡田隆平訳, “言語と人間” (1948), 創元社.)
- (23) Cassirer, E., “*An Essay on Man: An Introduction to a Philosophy of Human Culture*”(1944), Hamburg: Felix Meiner Verlag. (宮城音弥訳, “人間: この象徴を操るもの” (1953), 岩波書店.)
- (24) Merleau-Ponty, “*Phénoménologie de la perception*”(1945), Paris: Gallimard. (中島盛夫訳, 『知覚の現象学』 (2009), 法政大学出版局.)
- (25) 丸山圭三郎, “ソシユールの思想” (1981), 岩波書店.
- (26) 国広哲弥, “ソシユール構造主義は成立しない” 日本エドワード・サピア協会編『研究年報』第20号 (2006), pp. 17-22, 日本エドワード・サピア協会.
- (27) Bouissac, P., “*Saussure: a guide for the perplexed*”(2010), London: Continuum. (鷲尾 翠訳, “ソシユール超入門” (2012), 講談社.)
- (28) 国広哲弥, “ソシユール構造主義は成立しない” 日本エドワード・サピア協会編『研究年報』第20号 (2006), pp. 17-22, 日本エドワード・サピア協会.
- (29) 松澤和宏, “ソシユールの現代性—伝統的な時間をめぐって” (2004), 『月刊 言語』2004年12月号, pp. 50-53, 大修館書店.
- (30) Banveniste, E., “*Problèmes de Linguistique Générale*”(1966), Paris: Éditions Gallimard.
- (31) 岸本通夫監訳, “一般言語学の諸問題” (1983) みすず書房.
- (32) Saussure, F. de., “*Cours de Linguistique Générale*”(1916), Paris: Payot.
- (33) 小林英夫訳, “改訳新版 言語学原論” (1940), 岩波書店.
- (34) 加賀野井秀一, “知の教科書 ソシユール” (2004), 講談社.
- (35) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*”(2002), Paris: Gallimard.
- (36) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (37) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*”(2002), Paris: Gallimard.
- (38) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (39) Saussure, F. de., “*Cours de Linguistique Générale*”(1916), Paris: Payot.
- (40) 小林英夫訳, “改訳新版 言語学原論” (1940), 岩波書店.
- (41) 丸山圭三郎, “ソシユールを読む” (1983), 岩波書店.
- (42) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (43) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Cours de Linguistique Generale. Premier et troisième cours d’après les notes de Riedlinger et*



- Constantin*(1993 a), Collection Recherches Université Gakushuin n°24. Tokyo: Gakushuin University. (相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第三回講義<増補改訂版>” (2009), エディット・パルク.)
- \_\_\_\_\_, “*F. de Saussure Troisième cours de Linguistique General(1910-1911) d’après les cahiers d’Emile Constantin*”(1993 b), Paris:Pergamon Press. 及び小松英輔, “ソシユール自筆原稿の研究” (1994), (平成6年~平成8年度 科学研究費補助金基盤研究B(2) 研究成果報告書 課題番号06451091) (相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.)
- (44) 加賀野井秀一, “知の教科書 ソシユール” (2004), 講談社.
- (45) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Deuxième Cours de Linguistique Générale.(1908-1909) d’après les cahiers d’Albert Riedlinger et Charles Patois*”(1997), Paris: Pergamon Press.
- (46) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第二回講義 (1908-1909)” (2006), エディット・パルク.)
- (47) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Deuxième Cours de Linguistique Générale.(1908-1909) d’après les cahiers d’Albert Riedlinger et Charles Patois*”(1997), Paris: Pergamon Press.
- (48) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第二回講義 (1908-1909)” (2006), エディット・パルク.
- (49) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*”(2002), Paris: Gallimard.
- (50) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (51) 国広哲弥, “言語と概念” 東京大学文学部言語学研究室『東京大学言語論集'85』(1985), pp. 17-23, 東京大学文学部.
- (52) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*”(2002), Paris: Gallimard.
- (53) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (54) Bouquet, S. & Engler, R., “*Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*”(2002), Paris: Gallimard.
- (55) 松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』” (2013), 岩波書店.
- (56) 国広哲弥, “語の意味をめぐって” 澤田治美編, 『ひつじ意味論講座』第1巻 (2010), pp. 1-22, ひつじ書房.
- (57) 丸山圭三郎, “ソシユールの思想” (1981), 岩波書店.
- (58) 加賀野井秀一, “知の教科書 ソシユール” (2004), 講談社.
- (59) 丸山圭三郎, “ソシユールの思想” (1981), 岩波書店.
- (60) 国広哲弥, “ソシユール構造主義は成立しない” 日本エドワード・サピア協会編『研究年報』第20号 (2006), pp. 17-22, 日本エドワード・サピア協会.
- (61) 国広哲弥, “ソシユール構造主義は成立しない” 日本エドワード・サピア協会編『研究年報』第20号 (2006), pp. 17-22, 日本エドワード・サピア協会.
- (62) J.Gillieron et J. Mongin, *Étude de géographie linguistique*. (1905), H. Champion.
- (63) 鈴木孝夫, “閉ざされた言語・日本語の世界” (1975), 新潮選書.
- (64) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Cours de Linguistique Générale. Premier et troisième cours d’après les notes de Riedlinger et Constantin*” (1993), (Collection Recherches Université Gakushuin n°24).
- (65) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.
- (66) Eisuke Komatsu, “*F. de Saussure Cours de Linguistique Générale. Premier et troisième cours d’après les notes de Riedlinger et Constantin*”(1993), Collection Recherches Université Gakushuin n°24. Gakushuin University.
- (67) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.
- (68) 相原奈津江・秋津 伶訳, “フェルディナン・ド・ソシユール 一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録” (2003), エディット・パルク.
- (69) Saussure, F. de., “*Cours de Linguistique Générale*” (1916), Paris: Payot.
- (70) Engler, R., “*Cours de Linguistique Générale, Edition Critique*”(1968), Wiesbaden:Harrassowitz. p.243, 断章番号1764. 原文は以下のとおりである.

Mais ensuite, si nous considérons cet autre point que dans la même phrase je puis dire par exemple : *son* violon a le même *son* ; si précédemment je m’étais appliqué sur l’identité du son, je verrais ici que la tranche auditive *son* répété deux fois ne représente pas une identité. De même si on surprend la même suite auditive dans “*cet animal porte plume et bec*” et “*prête-moi ton porte-plume*”, nous ne reconnaissons pas qu’il y a là une identité. Il faut qu’il y ait identité dans l’idée évoquée. Elle comporte, cette identité, un élément subjectif, indéfinissable. Le point exact <où il y a identité> est toujours délicat à fixer.



これがまず一点目ですが、次に、別の文を例に出して、二点目を考えてみます。son violon a le même son [訳注：彼の(ソ) バイオリンは、同じ音(ソ)だ]。私が音の同一性<sup>イダンテイテ</sup>だけにこだわってれば、二度繰り返される son という聴覚の切片が、ここで同一性<sup>イダンテイテ</sup>を表わしていないことがわかるでしょう。

同様に、cet animal porte plumes et bec [訳注：動詞 porter の三人称単数+目的語 plumes と bec。この動物は羽根と嘴を持っている、の意] と <prête-moi ton> porte-plumes [ママ] [訳注：一つの名詞 porte-plumes。あなたのペン軸を私に貸して、という意] の中で、同じ音の繋がりに気付いても、私たちはそこに同一性<sup>イダンテイテ</sup>があると認めないでしょう。同一性<sup>イダンテイテ</sup>は呼び起こされる観念の中にこそあった、と言うべきなのです。

この同一性<sup>イダンテイテ</sup>は、定義できない主観的な subjectif 要素を含んでいます。〈同一性<sup>イダンテイテ</sup>がある〉という点を厳密にするには、いつも細心の注意が必要です。[太字とルビ、原文ママ]

(相原奈津江・秋津 伶訳2003：168)

- (71) Bouquet, S. & Engler, R., “Ferdinand de Saussure, *Écrits de linguistique générale*”(2002), Paris: Gallimard. (松澤和宏校註・訳, “フェルディナン・ド・ソシユール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』”(2013), 岩波書店).
- (72) 丸山圭三郎, “ソシユールの思想”(1981), 岩波書店.
- (73) 松澤和宏, “二つのドクサについて—「恣意性」と「世界の分節」—ソシユール文献学と『一般言語学講義』一”(2016)「日本フランス語フランス文学会2016年度秋季大会ワークショップ4 ソシユール『一般言語学講義』の1世紀—構造主義, 時枝論争, 新手稿」発表資料.
- (74) 松中完二, “ソシユール学説の一つの矛盾についての考察—言語記号の差異について—”久留米工業大学編『2015 久留米工業大学研究報告』第38号(2016), pp. 54-66, 久留米工業大学.
- (75) 丸山圭三郎, “ソシユールを読む”(1983), 岩波書店.
- (76) 本稿は, 2016年10月22~23日に東北大学で開催された日本フランス語フランス文学会2016年度秋季全国大会でのワークショップ「ソシユール『一般言語学講義』の1世紀—構造主義, 時枝論争, 新手稿」においてパネリストとして「Saussure と時枝誠記—Saussure 学説の受容と抵抗—」のタイトルで研究発表した内容に基づく。当日大会の司会と同ワークショップのコーディネーターを務めていただいた阿部宏先生(東北大学), 同じくパネリストとして有意義で示唆に富む研究内容をご教示頂いた松澤和宏先生(名古屋大学), 金澤忠信先生(香川大学), ならびに有意義なご意見とご示唆を頂いた加賀野井秀一先生(中央大学)に衷心より感謝申し上げます。言うまでもなく, 本文中の過失やミスはすべて筆者に帰するものである。